

琵琶湖における湖岸景観の変化と 景観対策

小 林 博

はじめに

琵琶湖はわが国最大の湖で、その大半が国定公園に指定され、美しい風景が随所にみられる。その風景ないし景観の構成上、湖岸線は重要な役割をはたしている。いわばそれは重要な景観構成要素である。琵琶湖の湖岸景観については、従来から琵琶湖研究所での研究の蓄積があり、また、県の湖国環境プラン（滋賀県地域環境計画）でもとりあげられている。しかしながら、現在の湖岸景観がどのような変化をたどって形成されたのか、またこれに対していかなる景観対策を考えればよいかについては、さほどふれられてはいない。本稿はこの点について若干の考察を試みたものである。

- (1) 例えば、桜井善雄「湖岸景観と生態的機能」、中岡義介「水辺の生活空間学的考察—琵琶湖湖岸での調査・分析結果をふまえて」、吉良竜夫「琵琶湖湖岸の景観（風景）の保全と利用をどう考えるか」（以上いずれも滋賀県琵琶湖研究所「景観生態研究会記録集」1982）、環琵琶湖研究会「環琵琶湖保全修景公園化に関する調査研究」1—3巻 1974—76
- (2) 滋賀県発行 1982

1 湖岸景観の歴史的变化

湖岸線の変化は、地盤の隆起、沈降などによる水位の変動、河川の沖積作用による河口デルタの拡大などによって生ずる。その有史以来の一般的傾向は水位の上昇による変化で、これは数多くの湖底遺跡の存在や記録⁽³⁾によって知られる。しかし、一時的には瀬田川の川ざらえによる水位低下も挙げられる。これらの変化によって当然湖岸景観は変わるが、ここでは省略し、とくに変化の大

きかった明治以降について見ることにする。

まず経年的な変化を見ればつぎのとおりである。

（1）道路の改修、新設による変化 一おもに大正から昭和にかけて一

湖岸線の変化はまず道路の改修に端を発した。即ち、明治14年県議会において西近江路の鎧岩（滋賀郡北小松村）の開削がとりあげられ、これが可決された。鎧岩は北小松から鶴川に至る西近江路に、西から張り出して湖に没する岩壁で「実ニ危険極マル難所ニシテ北越海岸ノ難路モスクヤト思ハル」（大伴議員の発言。明治14年滋賀県県議会会議録）とされ、前年の県議会でその改修が提案されたが、激論のすえ否決された経緯があった。こうして2年ごしで改修がきまり、開削が行われたが、これが湖岸線変化の初めとなった。

ついで明治21年（1890）、伊香郡大音の大音龍太郎が木之本一山梨子間の道路改修とトンネル開削を願い出た。山梨子は木之本付近の米の積み出し港であったから、輸送の便をはかるため急な峠道の改修が必要であったが、この願い出はきき入れられなかった。

しかし、大正9年（1920）木之本の富田八郎、海津の井花伊右衛門らが海津一木之本間の道路新設運動を行った。当時、この区間には十分な道路がなく、しかも4回も峠を越えねばならなかった。江戸時代から明治初期にかけて海津や塩津は湖港として栄えたが、以後鉄道路線から外れて衰退したので連絡道路の建設が望まれたのである。たまたまこの年堀田知事は283万円の予算で湖周道路計画を議会に提出した。これには塩津一木之本間の計画はなかったが、湖北地方の運動に応じて別に2万円を追加計上し、さらに翌年、15年継続事業として66万円で塩津一木之本間に道路を新設することとした。⁽⁴⁾

これによって湖北の沈水湖岸にそう新しい道路の建設が開始され、昭和2年11月30日、木之本一塩津間の湖岸道路およびその途中の賤ヶ岳トンネル（381.8m）が完成された。これが現在の国道8号線である。

塩津一海津間は、塩津から大浦までが月出の山越えて頂上部を湖北トンネル（昭和9年完成）で抜け、大浦から海津までは湖岸ぞいに新道をつくり、ようやく昭和11年に完成した。断崖の大浦湖岸は1—5号のトンネルを掘り、沿道に桜を植えた。ここが戦後新近江八景にあたる琵琶湖八景の1つ「暁

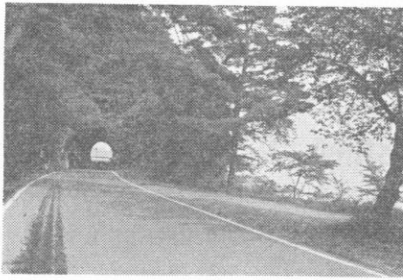


写真1 海津大崎 トネルの向こうにつづらを半島が見える。道路の右は湖である。

霧・海津大崎の岸礁⁽⁵⁾となった。（写真1）

以上のように湖岸線の変化は、まず湖北の岩石湖岸の新道開設で始まった。しかし、道路改修による湖岸線の変化はこれ以後殆どみられなかった。新しい変化は、昭和30年代のモータリゼーションまでまたねばならなかったのである。

（2） 工場の湖岸占有 —大正中期から昭和初期にかけて—

つぎの変化は工場の湖岸進出であった。大正中期ころから琵琶湖の水にひかれて用水型の近代的工場が湖畔につくられた。彦根には大正6年（1917）近江絹糸、同10年鐘紡があいついで設けられ、栗津（大津市）には大正8年旭人絹（実質的には大正末から）、長浜に昭和5年鐘紡、堅田に同年東洋紡がそれぞれ設立された。これらはいずれも湖畔に立地して湖岸を占有し、湖岸線に都市的景観を出現させた。

（3） 内湖の干拓による湖岸線の縮小 —戦中・戦後期—

第3番目の変化は湖岸線そのものの縮小である。それは干拓によってひきおこされた。琵琶湖の干拓はすでに大正5年、京都の奥村商会から計画が出されたことがあるが、これ⁽⁶⁾に対しては琵琶湖治水会ははじめ県民が反対し、県議会も慎重な考慮を望む建議を行ったため、立ち消えとなった。

その後、昭和8年になって県議会が琵琶湖利用に関する建議「琵琶湖利用対策ニ関スル意見書」を提出し、村地知事がこれをうけて昭和10年に「琵琶湖対策審議会」を設けた。これは「琵琶湖ニ関スル根本対策ヲ調査審議スル」（同審議会規程第1条）もので、とくに埋立て、干拓、治水、工場誘致、観光の問題をとりあげた。その結果、埋立て可能面積3,432haで、その一部を埋立ててもよいと答申した。ここに初めて埋立てがとりあげられたが、その計画は昭和18年第1期淀川河水統制事業のなかで現実化された。即ち、常時利用水量を従来の毎秒80tから145tにふやし、内湖を干拓して3,000haの良田を得ようとする

るものであった。⁽⁸⁾

これによって昭和19年3月、まず松原内湖の干拓が開始され、以後戦中・戦後にかけて計15内湖、面積2,521.3ha⁽⁹⁾が干拓された。

内湖の干拓は魚類の産卵場をなくし、水質浄化力のある葦を減少させるとともに、湖岸の景観を変え、湖岸線を短縮した。湖岸線の短縮は、入口の狭い入江内湖で4km、津田内湖で3.8km、貫川内湖で2km、四津川内湖で1.9km、計11.7kmも縮小した。

（4）湖岸の埋立て —とくに戦後期—

湖岸の埋立ては、小規模には大津で戦前から行われていたが、大規模化したのは戦後のことである。それはとくに南湖で大規模になされた。

まず初めから見れば、明治13年（1880）国鉄逢坂山トンネルの排土で扇屋関2,910.6m²を埋めたのが最初であった。ついで明治45年（1912）小船入堀49,054.5m²、大正3年（1914）14,958m²が埋立てられ、さらに昭和3年大橋堀2,369m²を大津市役所用地に、昭和7年同じく2,574m²を公会堂、図書館用地に埋立てた。以上はいずれも小規模であったが、昭和11年以後大型化してきた。即ち、同年から昭和17年にかけて膳所—粟津間の57,327m²が埋立てられ、同12—17年観音寺、尾花川、別所で県営による埋立てが行われた。

さらに昭和30年代以降、経済成長に対応して大津市は大規模な湖岸埋立てを行った。その第1次事業は33—37年間で、浜大津から紺屋か関までの13.8ha、第2次事業は同40—43年間で、打出浜から西の庄までの41.85haを行い、さらに同45—46年島の関2.87haを加えた。その合計面積は58.52haに及ぶもので、これによって市は新しい都市施設を収容できる空間を獲得するとともに、一部を分譲して収益をあげ、市財政に寄与した。埋立地は港湾施設、レジャー施設、市民会館・県立体育館・郵便局・NHK・琵琶湖文化館・琵琶湖研究所などの公共施設、ホテル・デパート・オフィスビル・マンションなどの民間施設で占められ、湖岸は人工化されて立体的市街地景観が埋立地に出現した。

埋立地はこのように初めは大津市街地の湖岸に限られていたが、県開発公社の設立後他の地区にもひろがった。即ち公社は昭和36年から3年間で、瀬田浦31haを埋立て、ついで同37—40年に木の浜125ha、40—42年比叡辻2.7ha、同

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

42—43年彦根松原 12ha をそれぞれ埋立てた⁽⁹⁾。瀬田浦と木の浜は工業用地として造成されたが、おりからの景気の停滞で目的を達せずゴルフ用地その他に転用された。比叡辻のそれは鐘ヶ淵化学に売られ、松原地区は宿泊施設用地となった（写真2）。しかし、いずれにしてもこれらの湖岸は人工化され、瀬田浦

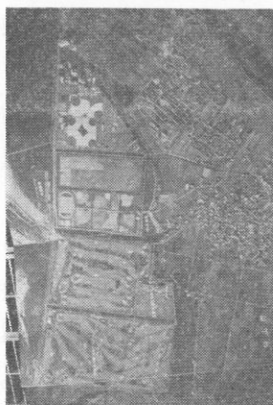


写真2 木の浜埋立地

3つのブロックに分けられている。利用はゴルフ場、運動場が目立つ。

で1.6km、木の浜で約2.2km、松原地区で0.6kmのコンクリート護岸が出現した。

湖中に人工島を造る計画は、昭和3年大津沖でなされたが実現せず、昭和40年代後半に再度浮上した。しかし、これも市民の反対や計画の不十分さなどから中止された。ただ湖南流域下水道の矢橋人工島は、紆余曲折の末昭和57年に造成された。このように埋立てによる湖岸の変化はおもに浅い南湖で行われた。

（5） レジャー関連施設の展開

湖岸におけるレジャー関連施設の展開は、湖岸線そのものの変化よりは湖岸景観の変化を導いた。まず景勝地としては、江戸時代以来の近江八景中、唐崎の夜雨（松）、矢橋の帰帆（港）、粟津の晴嵐（松並木）が湖岸に直接関係があった。これに加えて大正中期雄松崎が名勝候補地にあげられ、大正末から湖岸のレジャー化が始まった。即ち、大正14年大津市柳ヶ崎が初めて公衆水泳場としてひらかれ、昭和5年頃から大湖汽船株式会社によって雄松崎が水泳場として近江舞子（写真3）の名で開発された⁽¹⁰⁾。そのほか御殿浜（大津市）、真野浜（大津市）、青柳（志賀町）、萩の浜（高島町）、松原（彦根市）、あやめ浜（中主町）などが戦前にひらかれた。これら水泳場は季節的なもので湖岸の変化にさほど影響しなかった。しかし、戦後は湖のレジャーが多様化し、水泳場付近にもセカンドハウス、バンガロー、保養所が建てら



写真3 近江舞子

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

れ湖岸がかなり変わってきた。水泳場は戦後さらに増え、近江白浜、飯の浦、新海、マイアミなど計15に及んでいる。

ホテルは昭和9年県も加わって琵琶湖ホテルを柳ヶ崎に建てたのが初めて、ついで近江舞子ホテルがひらかれた。柳ヶ崎の湖畔にきわだった和洋折衷の琵琶湖ホテルの出現は、当時の人々を驚かせたが、それはまた、琵琶湖観光事業の始まりを示すとともに、将来の湖畔の立体景観を暗示するものであった。

戦後、経済の高度成長につれて湖畔のホテルも増加した。その初めは大津市茶が崎のホテル紅葉（レジャーホテル、紅葉パラダイス併設）で、ついで晴嵐荘（膳所）、琵琶湖大橋開通（昭和39年）に前後して堅田や木の浜（守山市）に名鉄マリーナホテル、ホテルレークビワ、やや遅れてKBS琵琶湖教育センター、ラフォーレ琵琶湖が建設された。これらの多くは高層で、棒状の立体景観を呈し、南湖を特色づけている。さらに昭和64年春開設を目指して超高層のプリンスホテル（130m）が大津市におの浜に建設されつつある。北湖ではわずかに彦根市松原のプリンスホテル、長浜市湖岸のロイヤルホテル、北ビワコホテルが立体的な変化としては目立つ程度である。

他方、国民宿舎や国民休暇村も湖畔に増加した。近江舞子ロッジ、つづらを荘（西浅井町菅浦）、豊公荘（長浜市）、今津荘（今津町）、近江八幡国民休暇村などがそれである。

ホテルや国民宿舎などが点的であるのに対して、保養所やセカンドハウスなどからなる休養地は面的な空間を占める。これらは水泳場に隣接するかまたは

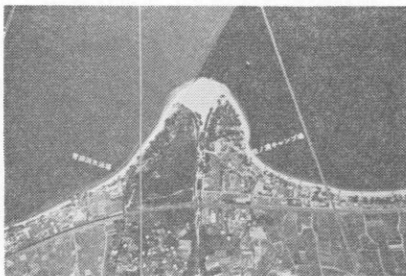


写真4 松の浦の保養地 大谷川の右岸に広がる。左岸の松林地帯が原景観である。

各河川の河口部に発達した。それはとくに北湖に多く、和邇川河口、蓬来、八屋戸、松の浦（写真4）、比良、北小松、萩の浜、近江白浜、中庄、知内（以上西岸）、南浜、松原、大藪、新海（以上東岸）等に見られる。ここでの問題は保養所などが湖岸に接して立地し、これを私的に占有する傾向が見られることである。そのほかでは、遊園

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

地、運動場、ゴルフ場、ボートレース場、競艇場、ヨット・ボート・モーターボート・カヌー・ウィンドサーフィンなどの水上スポーツ関連施設が設けられ、とくに南湖の変化が目立つ。

（6） 地域開発、琵琶湖総合開発による整備

最後に近年の変化は計画による意図的なものが多い。まず道路では昭和30年代後半から湖周道路の一部をなす長浜一彦根間、ついで彦根一柳川間に自動車道路が整備され、昭和39年（1964）に待望の琵琶湖大橋が完成、引き続き国道8号線の新賤ヶ岳トンネル完成（1968）、奥びわ湖パークウェイ完成（1971）、近江大橋開通（1974）をみ、湖岸景観を大きく変えた。

さらに昭和47年からは琵琶湖総合開発特別措置法によって、湖岸堤、湖周道路（建設中のところもある）、湖岸園地、休憩所、内湖の利用（例えば新旭町菅沼）、奥びわスポーツの森（びわ町）、安曇川青少年センター（安曇川町）、大津、彦根、長浜などの港湾、北山田、堅田、沖の島、尾上などの漁港の整備が進められ、湖岸の人工化が顕著となってきた。これらは一面で自然の改変を含むが他方で湖岸の親水性を高めた。¹⁰⁾

以上のように湖岸線は、明治以後、線一点一面一点と面一構造的枠組みという流れで変化してきた。

(3) その詳細は、筆者編「琵琶湖の水位変動に関する記録調査報告書」近畿地建 1988 参照

(4) 「滋賀縣市町村沿革史」第4巻 1961 および「大正9年滋賀県議会会議録」

(5) 「滋賀県土木百年史」1983

註(6) 「大正5年滋賀県議会会議録」

(7) 「昭和8年滋賀県議会会議録」

(8) 「琵琶湖利用対策審議会記録」滋賀県 1935 および「滋賀県史 昭和編 第2巻」1978

(9) 前掲注(5) および「新修大津市史 6 現代」1983

(10) 「10年の歩み」滋賀県開発公社 1971

(11) 前掲注(4)

(12) (5)、(6)はおもに拙稿“総合開発”(滋賀県史 昭和編 第2巻 所収)と「滋賀縣市町村沿革史 第2巻」による。

2 湖岸線変化の地域別特色

つぎに湖岸線の変化が地域別にどのように表れているかを見る。⁽³³⁾

まず全般的には、湖岸の人工改変は南湖周辺でより著しい。北湖周辺では湖岸堤と湖周道路の建設が目立つほか、河川の河口デルタ部の変化が注意される。

地区別には、A. 湖北の片山（高月町）から海津（マキノ町）に至る沈水地形の地区では自然がよく残る。海津一大浦の湖岸道路はそれまでの万字峠（万路峠、まんじゅう峠）越えに代わって生活道路ともなったが、それにもまして観光道路として大きな役割をはたし、湖岸の親水性を高めた。奥びわ湖パークウェイは大浦一菅浦間の生活道路を含むが、本質的には有料観光道路でつづら（葛籠尾）半島や歴史的集落菅浦を身近なものにした。道路の建設は一時自然破壊を起こしたが今は治まっている。大浦東南の入江は干拓をまぬがれた唯一の入江で湖北の景勝を深めるのに役だっている。琵琶湖八景中、新雪・賤ヶ岳の大観、暁霧・海津大崎の岩礁、新緑・竹生島の沈影の3つがこの地区から選ばれたのも自然美の豊かさを示すといえる。

B. 海津から高島町勝野にかけての湖西地区は、湖周道路がほぼできているが、海津一木津までの砂浜湖岸と安曇川の形成するデルタ湖岸に細分される。前者は松林の続く勝地が多く、知内川と石田川の河口デルタには水泳場や保養所、国民宿舎等がある。昭和47年に開通した湖西線による近接性を利して中庄新保付近は別荘地の開発が進んでいる。後者の安曇川左岸新旭地区はいわゆる

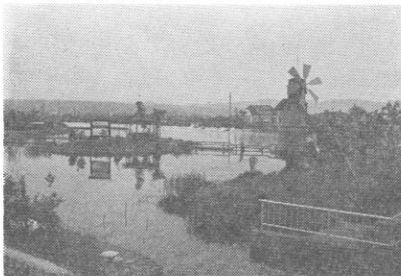


写真5 菅沼の風車の村 風車をシンボルに内湖を利用してレジャー地を開発したもの。

水没条里地帯で、柳、葦の植生が見られ、湖岸園地の造成もなされているが、湖周道路の完成後の変化が期待される。内湖の菅沼にできた風車の村（写真5）は今後の新しい利用方法を示すものとして注目される。安曇川河口は県立青少年レクリエーションセンターがあるがまだ民間資本の進出は見られない。右岸の南舟木・四津川付近

は湖周道路が未完成で変化は今後の課題である。鴨川河口から高島町勝野にかけては近江白浜、萩の浜の別荘地、水泳場が発展している。

C. 明神崎から大津市真野にかけての比良山麓複合扇状地の湖岸は白砂青松の砂浜湖岸で、近江舞子はじめ北小松、青柳、松の浦、蓬来、真野などの水泳場、キャンプ場が戦前から発達していた。戦後はこれに加えて保養所、別荘などのリゾート地化が進んだ。ここは山も近く山水一体化した観光レジャー地帯という特色をもつ。和邇川河口も戦後リゾート地化した。ここでは保養所、別荘などによる湖岸の私的占有が、景観保全上問題となる可能性を含む。

D. 琵琶湖大橋から瀬田に至る南湖西岸は、歴史的集落堅田を除いては、戦後、温泉、ホテル、ヨットハーバー、セカンドハウス、工場など多様な変化が見られ、大津市街地は数次の埋立てで全く変容、コンクリート湖岸にかわり、いわば市街化湖岸となった。

E. 瀬田から琵琶湖大橋東詰に至る南湖東岸は、瀬田浦と木の浜の大規模な埋立てで湖岸線が縮小し、さらに矢橋人工島の造成で複雑化した。この湖岸では目下湖岸堤と湖周道路を建設中で、それらの完成後の変化の可能性がきわめて大きいと考えられる。

F. 木の浜から米原町朝妻までの湖東は、大中の湖・津田内湖・松原内湖・入江などの大規模な干拓が進展して湖岸線が縮小・単調化した。この地区では木の浜なぎさ公園付近のホテル、レジャー地、近江八幡国民休暇村、近江八幡厚生年金休暇センター、新海浜の保養地化、彦根松原のホテル旅館団地（プリンスホテルの立体景が目立つ）など点的な変化が見られる。また長命寺、沖の島、彦根の港湾は整備された。長命寺山一奥島一帯が山地湖岸であるほかは、砂浜ないしは葭原で、その背後を通る湖周道路がほぼ完成に近づいており、岡山園地や曾根沼緑地なども整備された。そのため、なぎさ公園、あやめ、佐波江、牧、水か浜、宮か浜、新海浜など湖岸に点てつして水泳場のほか、ウィンドサーフィン、カヌー、水上バイク等の新しいレジャーの場が広がりつつある。その結果シーズンの休日には駐車場の問題が起こっている（写真6）。

彦根市街地の湖岸では工場が湖岸線を占有していたが、現在そこに湖周道路を建設中である。また明治以来の伝統を持っていた魚網工場（米原町磯）は医

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

療厚生施設に変わった。

G. 朝妻から片山（高月町）に至る湖北の湖岸は、長浜市街地と姉川河口の砂浜（水泳場と港）を除いては、変化に乏しい。長浜では港の整備に伴い湖岸が埋立てられ、高層ホテルが建設された。湖周道路はほぼ完成しつつあるが、奥びわスポーツの森、早崎港の



写真6 湖周道路と駐車 ウィンドサーフィンにきた車が道路を占有している。

ほかは変化に乏しい。延勝寺（びわ町）付近は葎の群生が広く見られ、その保存がとりあげられている。

(13) この項は、おもに1988年6月の現地調査による。

(14) もともと大浦一菅浦間は、菅浦の住民が自力で開いた道で、これを拡幅整備したものであり、菅浦の住民はこの区間は無料である。

3 県民の見た湖岸風景

琵琶湖の湖岸景観は全県的に捉えると以上のようになるが、これを個々の県民が風景としてどのように見ているかについて、2つの例からふれておく。

1つは先年選定された湖国百景で、これは各市町村から必ず1つ以上選ばれているところに問題はあがるが、いちおう県の代表的な風景を示すと見ることができる。このうち、湖岸に関わるものはつぎの33で、33%を占める。

型	自然	歴史	近代	備考	市町村名
1 比叡山からの大津市遠望			○	都市	大津
3 柳ヶ崎のヨットハーバー			○	レジャー	大津
2 堅田の浮御堂		○			大津
2 湖岸並木と近江大橋			○	交通	大津
2 瀬田の唐橋周辺		○		交通	大津
3 膳所公園のなぎさ	○		○	レジャー	大津
1 磨針峠から琵琶湖を望む	○	○			彦根

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

2	豊公園		○	レジャー	長浜
1	遊歩道から琵琶湖を望む	○			長浜
2	宮か浜と沖の島	○			近江八幡
3	矢橋の帰帆常夜燈		○		草津
2	琵琶湖大橋・なぎさ公園 付近		○	交通 レジャー	守山
3	近江舞子浜	○		レジャー	志賀
3	マイアミ浜	○		レジャー	中主
2	西の湖周辺	○			安土
2	承水溝のよし地	○			能登川
2	朝妻筑摩の琵琶湖岸	○			米原
2	湖北の鰐(えり)		○	生産・観光	湖北一帯
2	竹生島	○	○	宗教・観光	びわ
2	湖北の畦畔木		○	生産	湖北一帯
2	つづらを崎とパークウェイ	○	○	交通 レジャー	西浅井
2	月出の奥琵琶湖	○			西浅井
2	菅浦の集落		○	漁村	西浅井
3	余呉湖畔	○			余呉
2	海津大崎	○		観光	マキノ
2	海津の漁村		○	漁村	マキノ
3	知内の舟溜り		○	生産	マキノ
2	今津浜の松並木	○			今津
3	新旭浜園地	○		レジャー	新旭
3	安曇川と四つ手網	○	○	生産	安曇川
3	今在家の堀川	○			安曇川
2	沖の白石	○			安曇川
3	白髭神社・大鳥居		○	宗教・観光	高島

〔注〕 1—遠景 2—中景 3—近景

市町村単位で見たためか、さすがに遠景は少ない。しかし、周辺の山から琵琶湖を含む近江盆地を見渡す風景は、どこから見ても素晴らしいものがある。

例えば、前記のほか奥比叡ドライブウェイ、打見山、志賀町の湖西バイパス、比良ロープウェイ、海津の大崎寺、賤ヶ岳、山本山、小谷山、彦根城、荒神山長命寺自動車道、八幡山、三上山、琵琶湖大橋付近の高層ホテルの屋上などが眺望点である（写真7）。その他中景15、近景12であるが、これは厳密には区別しにくい。⁽¹⁵⁾



写真7 つづらを崎からの展望 尾上、山本山、湖北平野をへて伊吹山がのぞまれる。

風景を対象によって a 自然、b 歴史的物事、c 近代的構造物に分ければ、a が18、b が12、c が7（重複あり）で、自然が過半を占め、琵琶湖の原風景がいまなお大きな意味を持っていることが判る。歴史的物事の中には臥、畦畔木、四つ手網、漁村など今も機能を発揮しているものを含めたが、これらを除くと半分が減る。近代的構造物はさすがに湖南に多い。

他の1つは、風景条例啓発のために昭和63年県が行った第1回風景展の応募作品でどのような対象がとりあげられているかを見た。⁽¹⁶⁾ これによると、計146の内、琵琶湖関連が53で36%を占め、この比率はさきの33%と似ており、湖岸景観は県の景観全体の約3分の1を占めるといえるであろう。その内訳は、湖畔の中景ないし近景が16、湖の遠望（湖と対岸の山を描いたものを含む）14、水郷・入江・沼が8、港7、河口3、島3、ヨットハーバー2、その他では浮御堂、琵琶湖文化館、海津大崎、臥などであり、人文景観を含めた湖畔の自然を対象としてとりあげたものが圧倒的に多い。

これは要するに、県民にとって湖岸の風景は、豊かで穏やかな琵琶湖の自然景とこれに調和的に包み込まれた人文景というイメージで捉えられているといえるであろう。

(15) 樋口忠彦（「景観の構造」1965）によれば、近景は1本1本の木の葉、枝ぶりなどの特徴が視覚的に意味を持つ領域で広葉樹で約360m、中景は樹冠の大きさがほぼわかる距離、約6.6km、遠景はそれ以上としている。

(16) 「第1回滋賀の風景展作品集」滋賀県 1988

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

4 湖岸の景観対策

さてそれでは、湖岸の景観について県はどう対処してきたであろうか。

(1) 景観対策の動き

琵琶湖の湖岸はすべて国定公園（昭和25年指定）のなかに含まれる。したが

表1 自然保護地公有化の概況 (単位：㎡)

名 称	所 在 地	取得年度	面 積	備 考	
内湖 湿原	浜 分 沼	今津町浜分	47・49	60,882	水生植物生 育地 (琵琶)
	〃 貫 川 内 湖	今津町深清水	55・57	62,276	〃 (琵琶)
	〃 長池周辺湿原地	大津市葛川木戸 口	54・55	98,897	高所湿原 (一般)
風致 景観	〃 野田沼およびその周 辺	湖北町津里	57	66,245	水生植物生 育地 (琵琶)
	〃 余 呉 湖 周 辺	余呉町および木 之本町	45～ 49・57	81,901	湖 辺 景 観 (一般)
	〃 〃 月 出	西浅井町八田部	49	915	〃 (一般)
	〃 湖岸緑地(海津園地)	マキノ町海津	49	1,947	〃 (琵琶)
	〃 〃 (奥出浜園地)	西浅井町菅浦	51	491	〃 (琵琶)
	〃 〃 (知内園地)	マキノ町知内	54・55	7,196	〃 (琵琶)
	〃 西の湖周辺浮島	近江八幡市北之 庄	58	12,321	水生植物生 育地 (琵琶)
	〃 〃	安土町下豊浦	58	30,153.82	〃 (一般)
	〃 高月町湖辺林地 (片山～山梨子)	高月町西野	58	79,558	湖 辺 景 観 (琵琶)
	〃 〃	高月町片山	58	45,407	〃 (琵琶)
	〃 湖岸緑地(菅沼園地)	新旭町藁園	53・56	7,959	〃 (琵琶)
	〃 生 杉 ブ ナ 林	朽木村生杉	46	20,036	ブナ原生林 (一般)
	〃 大 池 寺	水口町名坂	49	12,172	アカマツ天 然生林 (一般)
	〃 大浦～二本松湖辺林	西浅井町大浦	49	37,792	湖辺天然木 (一般)
	その 他	〃 大石竜門樹林	大津市大石竜門	54	127,167
〃 奥びわ湖パークウェ イ関連用地		西浅井町および 高月町	44～46	619,183	アカマツ天 然生林 (一般)
〃 三島池鳥類生息地		山東町池ノ下	49	75,232	野鳥の生息 (一般)
〃 今津浜分浜			61～62	3,549	湖 辺 景 観 (琵琶)
〃 海 津 大 崎			61	37,039	湖辺天然林 (琵琶)
〃 つ づ ら を 崎		62	41,964	〃 (琵琶)	
計 24カ所			1,618,715㎡		

(昭和63年4月現在) (滋賀県生活環境部資料)

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

って自然公園法の下にあるが、滋賀県はこれに対して独自の対策を講じてきている。その端緒は昭和46年で、同年3月の県議会において野崎知事が琵琶湖総合開発の基本方針を開発から環境保全第一に転換する旨を表明したの⁽⁷⁾に始まる。ついで同年12月県議会で商工労働部長が、観光レクリエーションの基本的な対応策として、(イ)保護すべき湖辺を強力に保護して、水に親しめる公共空間とする、(ロ)湖辺のスプロールの開発を防止し、秩序ある開発を進めるために、地域環境になじむ施設群を計画的に分散配置する、(ハ)琵琶湖の美しい環境を育成する、と述べた。(イ)に関連して自然保護地公有化の動きはこの前後から進められ、昭和63年4月現在で表1のように24カ所、1,618,715㎡に達している。このうち琵琶湖総合開発関連は13カ所であるが、その他一般でも湖岸に関わるものが5カ所ある。最大は奥びわ湖パークウェイ関連用地、ついで片山—山梨子の湖辺林地でいずれも湖北である。

また全県的に景観対策を積極的に進めるため、同60年7月、「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」を施行した。この条例は大切な地域や地区の指定による景観対策の推進、大きな建物や工作物に対する景観対策の推進、県民の自主的なまちづくりによる景観対策の推進、市町村による地域の特性を生かした景観対策の4つを柱としている。このなかで湖岸を琵琶湖景観形成地域および琵琶湖景観形成特別地区に指定し、届出を必要とする行為をきめて届出について必要な指導助言を行えることとしている⁽⁸⁾。その状況は表2のとおりで、とくに建築物・工作物の色彩や敷地内の緑化措置に関するものが多い。

ついで昭和62年6月、県は湖国環境

表2 指導助言項目毎の件数

項目	建築物	工作物
敷地内における位置	15	1
形態	14	3
意匠	7	3
素材	—	2
色彩	36	3
敷地の緑化措置	110	4
指導助言事項無し	71	8

(協議中の2件を含まない)

市町毎の届出件数

大津市97, 志賀町22, マキノ町18, 彦根市16, 長浜市11, 守山市・びわ町各8, 米原町・高島町各7, 新旭町6, 近江町4, 湖北町・西浅井町・草津市・安曇川町・今津町各3, 中主町2, 能登川町1 合計 221件

(滋賀県企画部地域振興課の資料)

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

プラン—滋賀県地域環境計画—を発表した⁽⁶⁹⁾。これは琵琶湖を中心に滋賀の特性を生かした明日への地域環境づくりを目指した計画であるが、地域環境の構成要素に水環境、大気環境、都市的生活環境、自然環境、歴史的環境とともに湖国の風景をとりあげ、風景に関する施策の基本方向を示している。そのなかで「水辺景観の保全と創造」を1項目とし、恵まれた自然景観と一体となった水辺の保全と併せて、親しみのある水辺をつくる必要をとき、以下の景観対策を講ずるとしている。

- ・湖辺に展開する良好な自然景観の保全
- ・湖岸・河岸の樹木・樹林の適正な保全と維持管理
- ・湖岸緑化の推進
- ・自然材料等を活用した親水性の高い水辺（石垣護岸など）の保全と整備
- ・公園・広場などのオープンスペース、レクリエーション空間の創出
- ・河川における散策路、サイクリング道などの整備
- ・水辺の建築物や工作物の形態や色彩などに関する周辺景観との調和

ここでは、(ア)自然地の保全、(イ)風土的な景観の保全修景、(ウ)うるおいと親しみのある水辺の育成を基本にしたところに特徴があるが、対策としては項目羅列にとどまっている。具体的事業としては、自然公園施設整備事業、防風林造成事業、よし地保全造成事業、環琵琶湖保全修景公園化植栽事業などがある。しかし、これらの相互連関はかならずしも明らかではない。

(2) 地区別景観対策

そこで地区別の考察が必要となる。これについて前記の計画では、全域を1 大津、2 湖南、3 甲賀、4 中部・湖東、5 湖北、6 湖西に分け、環境特性と環境保全の方向にふれている。そのうち、湖岸に関するものを挙げれば、以下のとおりである。

- 1 大津
 - ・近江舞子沼などの内湖、および雄琴、真野、近江舞子などの砂浜の保全
 - ・雄琴付近に水鳥公園整備を促進
 - ・市街化した湖岸部は、積極的な修復によりうるおいのある空間として、親水性を高めるとともに、レクリエーションの場として活

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

用をはかる。

- 2 湖南
- ・自然湖岸を保全するとともに、レクリエーション・スポーツの場憩いの場等として整備をはかる。
 - ・志那中湖、平湖などの内湖の保全
 - ・草津市から守山市にかけての湖岸および旧野洲川北流河口地域に水鳥公園の整備
- 4 中部
- 湖東
- ・西の湖等内湖を含む湖辺の保全、保健・休養の場としての活用
 - ・荒神山を含む湖辺一帯の保全、青少年等の自然観察、環境学習の場としての活用
 - ・内湖（曽根沼、野田沼）や砂浜（新海、松原）の保全
 - ・犬上川河口の水鳥公園の整備
 - ・彦根市街地近くの残存する自然湖岸を保全し、オープンスペース、レクリエーションの場として活用
- 5 湖北
- ・優れた沈水湖岸景観の積極的保全、観光、レクリエーションの資源としての活用
 - ・姉川河口—余呉川河口に至る湖岸のよし地の保全（写真8）
 - ・内湖（蓮池、野田沼、南浦内湖）の保全
 - ・尾上—延勝寺にかけて、水鳥公園の整備
 - ・片山—山梨子間の湖辺の公有化
- 6 湖西
- ・自然湖岸（マキノ浜、今津浜、海津大崎）の保全とレクリエーション的活用
 - ・内湖（貫川内湖、乙女か池、五反田沼、菅沼）の保全
 - ・松の木内湖付近に水鳥公園整備
- 内湖の保全は、生態系の保全、水質浄化機能、湖辺景観づくりなどの観点か

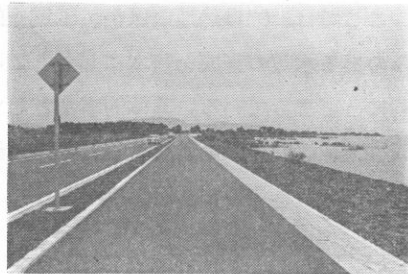


写真8 延勝寺付近の湖岸道路 よしの群生地が右手に見える。道路建設のためかなり減少した。

ら必要であるとした。

（3）筆者の見解

筆者の見解は、基本的には上と同じであるが、もう少しきめ細かさがほしいと考える。即ち、(ア)各湖岸の自然特性を考えて、その価値、利用の可能性を検討し、類型区分する。(イ)その場合、今後の観光・レジャー活動の多様化傾向からみて、鑑賞（眺望）空間、参加空間、行動空間の基準も入れる。(ウ)これに各湖岸の地理的条件、土地所有関係などを考えて将来にわたる改変の可能性を予測する。(エ)この予測に基づいて各湖岸の今後のあるべき景観像をもとめ、保全と育成をはかることである。

とはいえ、前提的に湖岸は山地湖岸（湖北および奥島付近）、田園湖岸（砂浜、よし地、浜堤の湖岸と背後の田園）、市街地湖岸に3大別される。山地湖岸は自然景観に優れ、保全すべきものであり、市街地湖岸は修景、規制されるべき性格をもつ。問題は田園湖岸で、これは今後の農業の動向ときわめて深い関係にある。しかし、四囲の山やま、湖、田園湖岸は三位一体となって湖国の原風景を形成してきたもので、その荒廃は重大な問題である。これにいかに対処するかについては、21世紀にむけて十分な検討が求められる。

さて私見による地域区分はつぎのとおりである。

1 湖北	(a) 田園・市街地湖岸（南浜—長浜—朝妻）	参加・行動空間
	(b) よし地・田園湖岸（片山—南浜）	鑑賞空間
	(c) 山地湖岸（片山—塩津—菅浦—海津）	鑑賞空間
2 湖西	(a) 砂浜・田園湖岸（海津—今津—木津）	鑑賞・参加空間
	(b) よし地・田園湖岸（木津—鴨川河口）	鑑賞・参加空間
	(c) 砂浜・レジャー地湖岸（鴨川河口—真野）	参加・行動空間
3 湖南	(a) 準市街地湖岸（真野—柳ヶ崎）	参加・行動空間
	(b) 市街地湖岸（柳ヶ崎—石山）	鑑賞・参加空間
	(c) 埋立て・よし地・田園湖岸（瀬田—木の浜）	鑑賞空間
4 湖東	(a) 砂浜・田園湖岸（木の浜—長命寺）	参加・行動空間
	(b) 山地湖岸（長命寺—伊崎）	鑑賞・参加空間
	(c) 砂浜・田園湖岸（伊崎—彦根）	参加空間
	(d) 準市街地湖岸（彦根—朝妻）	参加・行動空間

ここで、鑑賞空間とは、おもに眺め鑑賞される湖岸区域を意味し、観光対象としての性格が強い空間をさす。参加空間とは、ホテル、保養所、セカンドハ

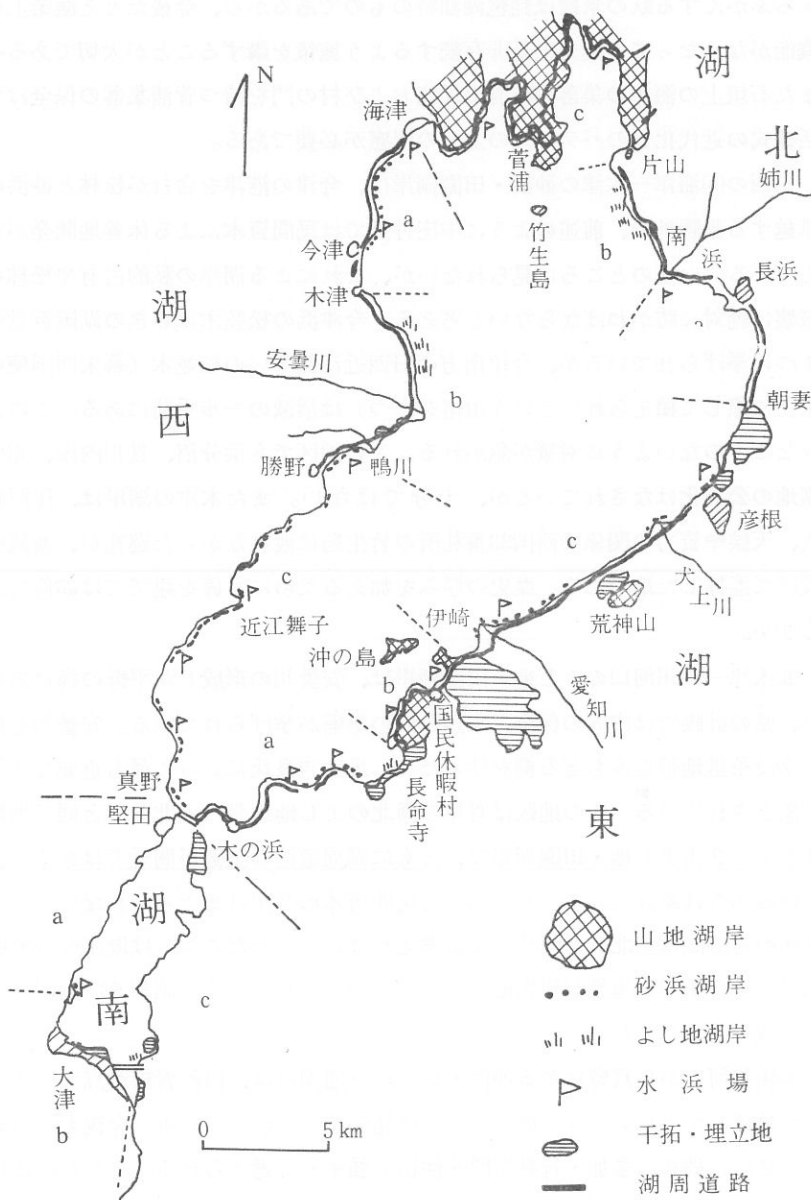
琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

ウスなどその地を訪れて宿泊し、水泳等を行い、自然の中に加わる形で過ごす湖岸区域を意味する。行動空間とは、ヨット、ボート、モーターボート、ウィンドサーフィンなどの水上スポーツを行う空間で、自然とは対立的に人間が自己主張をする場をいう。湖周道路が完成すれば、親水性と近接性が増大するであろうから、行動空間としての湖岸はさらに拡大するとみられる。これに対応するためには、駐車場のスペースを分散的に配置する必要がある。

さて上述の区域について具体的に見れば、湖北の(a)朝妻から南浜にかけての田園・市街地湖岸は、長浜港と豊公園を核に今後多様な都市化が進むと見られる。湖周道路は鐘紡工場などに遮られ、連続性を欠く。都市計画道路は工場地区西側の湖岸に予定されているが、早期実現が望まれる。今後、長浜—彦根の軸帯化が予想され、なお中京方面からの影響も強まると見られる。それだけに長浜南方の湖岸緑地の整備や水上スポーツのための対応が急がれる。

湖北(b)のよし地・田園湖岸は大規模によし地がみられるところで、前記のように保全が考えられている。しかし、この群生景観は背後の広々とした田園地帯と一体となって琵琶湖の原風景を構成するもので、田園なしには意味がない。それだけに田園地帯の存続をたえず考慮する必要がある。また広くはつぎの山地湖岸と対（つい）をなして琵琶湖の自然景観を代表するものである。よし地の保全は水質浄化機能とともに、「このようなより広い枠組みのなかで捉えられるべきである。ところで湖周道路の完成はこの地区の親水性と近接性を高めるので今後の商業資本の進出が予想される。これへの対処法はこれからの課題であろう。

湖北(c)の山地湖岸は、美しい自然景観が最も良く残る地区であり、自然の保全が最優先される。保全のためには、土地の公有化が有効な手段であるが、前掲表1のように片山—山梨子の湖辺、菅浦奥出浜、つづらを崎、奥びわ湖パークウェイ関連地、大浦—二本松湖辺、海津大崎など計 862,349㎡ が公有化されている。湖辺には休憩所、展望点、丸子舟の野外展示などがあるが、湖北三湊、北国街道、菅浦など歴史的な厚みを美しい自然のなかに溶け込ませた観光資源化をはかることが望ましい。しかし、すでに飯の浦に見られるような関連施設の過剰進出を防ぐことが肝要であろう。なお月出峠付近（近年は近くの休憩所）



湖岸の地域区分

からふかんする魎の景観は琵琶湖独特のものであるから、今後たとえ漁業上の機能がなくなっても観光上是非存続するよう施策を講ずることが大切である。また石垣上の海津の集落や特有の民家および村の門を持つ菅浦集落の保全は生活様式の近代化とのバランスの上での配慮が必要である。

湖西の(a)海津一木津の砂浜・田園湖岸は、今津の港津を含むが松林と砂浜の卓越する景勝地で、前述のように中庄付近では民間資本による休養地開発が進んでいる。いまのところは見られないが、これによる湖岸の私的占有や松林の破壊は絶対に防がねばならないと考える。今津浜の松並木はさきの湖国百景の1つに挙げられているが、今津南方の旧西近江路ぞいの松並木（幕末回国使の来訪に際して植えられたという由緒をもつ）は消滅の一步手前にある。このようなことのないように対策が急がれる。この地区でも浜分沼、貫川内湖、知内園地の公有化はなされているが、十分ではない。また木津の湖岸は、江戸時代、天候や資力の関係で西国33番札所の竹生島に渡れなかった巡礼が、賽銭を投げて遙拝した地である。歴史の厚みを加えるためにも碑を建てては如何であろうか。

(b)木津一鴨川河口のよし地・田園湖岸は、安曇川の形成した平野の縁にあたり、県の計画では内湖の保全、水鳥公園の整備が挙げられている。安曇川左岸の水没条里地帯をふちどる柳を伴ったよし地は吉良氏によって最も重要な保護対象とされている。この地区は対岸の湖北のよし地地帯（湖北b）と同じ地域性をもつ2大よし地・田園湖岸で、ともに湖周道路の全通が間近ではあるが、鉄道線からは離れている。したがって民間資本の進出はまだみられない。この地区の対処法は湖北bと同じように考えればよい。ただここでは既出の菅沼風車村という新しい施設が観光協会によってつくられている（昭和63年3月）。その成否が注目される。

(c)鴨川河口から真野に至る砂浜・レジャー地湖岸は、白砂青松が点てつする景勝地で、すでにレジャー地としての開発がかなり進んでいる。今後もこの動きはさらに続き、参加・行動空間的性格が強まると考えられる。それだけに自然の保全に万全を期するとともに、水泳場とその他の水上スポーツの場を区別する必要があると考える。また松林の保存維持に関係者全部が一体となって努

力するようなシステムの確立が望まれる。写真9は萩の浜における法人施設の例であるが、松林の連続性を壊した悪例である。これと関連してこの地区では開発が早かったためか、湖岸の私的占有があちこちに見られる。これは是正も施策の1つである。

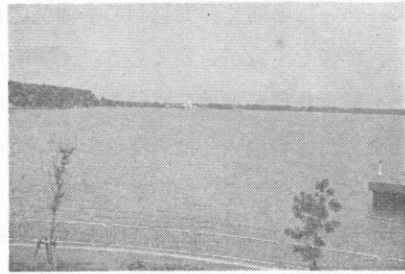


写真9 萩の浜の湖岸 白い保養所が松林を切断してしまっている。

湖南(a)真野一柳ヶ崎の準市街地湖岸

では多様な都市的利用が無秩序に見られる。歴史的集落堅田の湖岸修景をはかるとともに、個々に分断された利用形態の連携修復を考え、湖畔に周回遊歩道を設けて親水性を高める必要がある。またヨットハーバー、モーターボート基地などを整備して行動空間としての性格を強めるべきである。(b)大津市街地にあたるこの地区では大規模ななぎさ公園計画がある。砂浜湖岸の造成は望ましい。しかし自然のメカニズムの十分な検討が必要である。(c)瀬田一木の浜間の埋立て・よし地・田園湖岸は、南部と北部に比較的大きい埋立地があり、ボート競艇場、ゴルフ場、グラウンド、ホテルなどの利用が見られるが、その中間部は広大な田園が広がり、湖岸に湖周道路が建設されつつある。湖岸には博物館構想もあり、道路開通後の民間資本進出のポテンシャルはきわめて高い。それだけに風致地区、市街化調整区域の規定を積極的に生かして、対岸(a)地区の二の舞にならぬよう注意すべきである。大津湖南都市計画区域内におけるこの地区の田園湖岸緑地としての意義は大きい。

湖東(a)木の浜一長命寺にかけての砂浜・田園湖岸は既存の水泳場を繋ぐ形で湖周道路がほぼ完成の域に達し、湖岸緑地が整備された。これに伴ってウィンドサーフィンなどの水上スポーツが湖岸の各地で展開されている。その来集範囲はひろく大阪、京都、奈良、三重、岐阜、愛知の各県に及ぶ。これら水上スポーツは水泳とは違い3季型であるし、今後はこれらに対応する施策が必要である。(b)奥島一带の山地湖岸は自然景観が優れているし、国民休暇村などのレジャー地開発がなされた現状程度を維持してこれ以上改変を加えるべきではないと考える。一時、民間資本の沖の島進出がはかられたが、地元の反対で失敗

琵琶湖における湖岸景観の変化と景観対策（小林）

に終わったと聞く。琵琶湖の水環境、自然景観保全の上も喜ばしいことであるが、今後も注意が必要である。(c)伊崎から彦根に至る砂浜・田園湖岸は、浜堤上に所々集落が立地している点で、他の砂浜湖岸とやや異なる。したがってまとまった休養地開発は新海浜を除いては見られない。この地区ではこれ以上急速な変化は予想されないが、薩摩一三津屋間の美しい松林が破壊されぬよう対処法が大切であろう。荒神山と曾根沼緑地とを一体化した青少年用のレジャー地は計画以上のものを望みたい。(d)彦根一朝妻間の準市街地湖岸は、これまで切断されていた彦根の湖岸に湖周道路が建設されるので、その景観上、観光上の価値を著しく高めるものと見られる。それとともにレクリエーション地としての松原地区の整備が望まれる。毎年読売TVの行う松原での手造り飛行機の飛行競争（鳥人コンテスト）は松原のポテンシャルを示すものであり、これらに積極的に対応することも大切である。

- (17) 「昭和46年滋賀県議会会議録」および拙稿「昭和46—49年県議会の概説」（「滋賀県議会史」第10巻 1988）
- (18) 「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」（昭和59年7月19日滋賀県条例第24号）第7、9、10、13条
- (19) この計画書は、5章から構成され、302ページに及ぶものである。
- (20) 注(1)吉良竜夫の論文

以上、湖岸景観の変化と景観対策について見てきたが、要するに景観は自然と人間との織りなす生きた像であり、時とともに変化する。とはいえ、琵琶湖の湖岸景観は近江のアイデンティティにつながるものである。それだけに美しい調和のとれた全体像を保っていくことが大切であろう。（1988. 7. 31）